

サイゴン 日本語学校 始末記

イデス
マシ

ル

ナイト

マス、オ

イデス

マシ

マス

ス」

ドル

イト

オ

オ

デ

マ

神田 憲行 著

Noriyuki

Kanda

LIAMON CHUQUIN

DIANG NI TIU-THIEN GIANG GIANG VIE



タンハ

ナタハキョウ、ナニツ

サイゴン 日本語学校 始末記



潮
出
版
社

神田

Noriyuki

憲行 著

Kanda

サイゴン^{にほんこがつこうしまつぎ}日本語学校始末記

著者／^{かんだのりゆき}神田憲行

●

印刷／1994年10月 1 日

発行／1994年10月15日

発行者／富岡勇吉

発行所／株式会社潮出版社

郵便番号102／東京都千代田区飯田橋3-1-3／振替00150-5-61090

電話／販売部03(3230)0741・編集部03(3230)0771

●

印刷／明和印刷

付物印刷／栗田印刷

製本／東京美術紙工

●

© Noriyuki Kanda, Printed in Japan. 1994

ISBN 4-267-01363-2 C0095

サイゴン日本語学校始末記 ● 目次

第1章

ぼくが日本語学校の先生になったわけ

7

第2章

教壇からみたベトナム人

53

第3章

ハノイ人とサイゴン人

97



第4章

学校がなくなる!?



第5章

学校崩壊



あとがき

装　　丁　岡村啓治

表1のカバー写真は、サイゴン日本語学校の生徒と著者。
表4のカバー写真は、サイゴンで庶民の足となっているシクロ。

サイゴン日本語学校始末記

Lesson 1

第1章

ぼくが日本語学校の先生になったわけ

1 バブルから月給一〇〇ドルへ

新宿のバー「ふらて」。

そこは薄暗い階段を下りると、静かなジャズが流れていた。ぼくは女性とふたりだった。

「それで、神田さんはベトナムに行ったあと、どうするんですか。仕事はもうやめちゃうんですか」

ひとつ歳上の彼女は丁寧な話し方をする。それが彼女とぼくの間に、目に見えないバリアーをはられているように感じていた。

「いや、なんにも決めてません。いきあたりばったりだから……」
そういつて水割りを口に含むぼくを彼女は見ない。

「あの、ぼく今日は……さんとずっと一緒にいたいな」

「え」

「うん、だから今日は朝まで一緒にいようよ。お願いだから」

ぼくはあと一週間後に東京を引き揚げ大阪に戻り、ベトナムに行ってしまう。彼女に会えるのも今日が最後だ。一緒にいたかった。

「古いなあ。古い、古い。いまどきそんなこといっても、女性はいきませんよ」

彼女も男性からこんなこといわれたのは、初めてなのだろう。テレ隠しのようにぼくを笑った。でも、ぼくが笑わないのを見て、黙った。

「あたしはそんな女ではありませんよ」

「すいません。でもぼくは本気なんです」

「じゃ、もしわたしが今夜おつきあいすれば、ベトナムに行くことをやめてくれますか」

「ウーン、飛行機の切符も買っちゃったし、いまさら捨てるのももったいないし……」

「……なにそれ……」

うわあい、やつぱり返事がセコかったか。

一九九二年、二十八歳の夏。ぼくはバブルだった。大阪から東京に出てきて二年目、週刊誌の記者としてやっと生活も安定してきた。昔の「極貧」時代を知る仲間にはぼくを「よっ、バブル・

ライター！」と呼んだ。

でもいくら生活が安定しても、ほくは東京が好きになれなかった。尻がムズムズするような焦りがあった。かといって大阪に戻りたいわけでもない。ただトウキョウにしていると始終落ち着かない感じがする。

最初は「どこか外国に住んでみたい」という思いつきだった。酒場でのムダ話にそのことを出すと、

「おまえも？ オレもそんな夢があるんだ」

という人が意外に多かった。

「ぼくはバンコクに住みたいんだ。嫁さんもタイ人をもらう。だからタイ語を勉強してるし、貯金もしてるよ」

というフリーライター仲間もいた。この変な焦燥感自分だけじゃないんだとぼくは安心し、外国で暮らすという思いつきにいつそう夢中になった。

「どうしてベトナムにしたんですか」

とよく聞かれる。そのたびにぼくは、

「ベトナムって、ベトナム戦争以降のことあまり知られてないでしょう？ 報道する人もすぐ戦争のことから話を始めるし。『むかし、むかし……』って感じで。そうじゃない、いまのベトナム

ムが知りたいんですよ」

と答える。これは半分本当だし、半分はあとから取ってつけた理由だ。地図の上にペンをたて、ポトンと倒れたところがベトナムだった、というほうが実際に近い。それにベトナムは滞在費が安い。当時のぼくの十数万円の貯金に少しのプラスアルファで行ける。

在日ベトナム人のAさんとの出会いも大きかった。

とりあえずベトナムに留学したい、と相談にいった旅行代理店で紹介されたのがAさんだった。Aさんはベトナム戦争中に当時の南ベトナム政府から日本に留学に来て、国が「消滅」してしまったために日本にそのまま残り、いまは東京で会社を経営している。

「ぼくがサイゴン（現ホーチミン市）でやっている日本語学校の先生をしませんか」

初めて会ったAさんの会社で、彼はこうきりだした。

「でも日本語教師ってどんな仕事なんですか」

「日本語教えるのにきまつてるじゃない。仕事は何？ フリーライター？ だったら日本語を教えるのにぴったりだよ！」

「ぼくはベトナム語はもちろん英語も話せません」

「むこうで勉強すればいいよ。それにベトナム人の先生もいるから、授業でベトナム語話す必要はないと思うよ」

押しまぐられてためらうほくに、Aさんは笑いながらダメ押しした。

「むこうで一年間教えてくれたら、往復の飛行機代と住むところと給料を出すよ」

全額自費を覚悟して、あとのぐらい貯金すればいいのか悩んでいたほくに、それは願ってもない誘いだった。

「失礼ですが、給料はいくらなんですか」

「一〇〇^{ドル}。これだけあればベトナムで十分だよ！」

一〇〇^{ドル}で本当に十分だろうか。帰り道ほくは本屋に飛び込んで、日本貿易振興会（ジェトロ）が監修している貿易資料をいそいそと買い求めた。それによると、ベトナムのひとりあたりのGNPは二一五^{ドル}（八九年）になっていた。半年分の給料を一カ月で貰う……。

（よっしゃ決まりや、いざベトナムへ！）

と決心はついたが、行動に移すと、仕事、お金、人間関係……と整理しなくてはならないものが山のように出てきた。ある編集者は、

「ベトナムに先生に行くということは、ライターをやめるってことだね。ふーん」

とせせら笑ったが、ほくは、

（ペンと原稿用紙とネタさえあったらどこでもライターはできるやないか。東京におけるモンだけがライターか）

と思った。好きな女性のこともしよう。だから冒頭の新宿のバーでの会話になった。ま、これでケリがついた（？）けれど。

母親は、

「せっかく東京で食べていけるようになったのに……」

と残念がった。

「ベトナムでエイズの人いっぱいではるんやろ」

「それはタイやで」

「地雷も気つけないあかんし」

「それもカンボジアや」

結局母親には、彼女が好きな故・近藤紘一を引き合いに出して、

「ベトナムって人情もあるしメシもうまいし、大阪に似てエエとこなんやで」

と納得させた。

お金も予想外にかかった。東京のアパートを引き払って大阪に帰る引っ越し代を払い、どんな病気になるかわからないから海外傷害保険に入り、変圧器付きの簡易湯沸器と一年分の荷物を詰め込むカバン、予備のカメラを買って……飛行機代も最初は立て替え払いで自分で出さなくてはいけなかった。やっとこさ残ったのが四〇万円ちょっと。そのうち半分を予備費として両替して、